

小橋建太選手への感謝“楠田行展”

プロレスラーの引退試合はこうでなくてはならない、そう思った5月11日。僕は、東京・日本武道館で行われたプロレスラー小橋建太(46)の引退記念試合を、京都の映画館でライブ・ビューイングした。21歳でレスラーになり、25年間歩んできた自身のプロレス人生を「自分の青春だった」と振り返った小橋。悲壮感を全く感じさせず、晴れやかな表情で語った小橋に感動した。涙が止まらなかった。こんなに感動したのは久しぶりだ。

小橋建太…身長186cm、体重115kg。京都府福知山市出身、得意技は逆水平チョップとムーンサルトプレス、リアアット。度重なる膝の故障と、2006年に発見された腎臓がんに打ち勝ち、復帰した経験を持つ。まさに「鉄人」の呼び名が相応しいレスラーである。全日本プロレス、そして全日本と袂を分かったプロレスリング・ノア、2つの団体に活躍した。

鉄人の小橋も、第一線で活躍には限界が来ていた。がんを克服したとはいえ、全盛期から比べると体重が落ち、動きも精彩を欠いていた。思い出すのは09年6月、リング上で亡くなった三沢光晴さん(46)。三沢さんは頸髄離断で亡くなった。首の怪我が致命的だった。昨年7月、小橋は首の手術を受けている。医者言葉は「三沢さんよりも首の状態が悪い」。

プロレスはスペクテイター(観客)スポーツ。観客あつてのものだ。レスラーが客を興奮させ、客がまた、レスラーを盛り上げるライブ感の高いもの。だからこそ、レスラーは客の観たいに答えるため技を繰り出し、そして技を受ける。小橋は試合では常に、体を酷使しファンに応えた。満身創痍のコンディションでは、「ファンの期待に応えることができない」。引退理由の一つとして小橋は語る。

5月11日の引退記念興行に集まったレスラーたちは、小橋のプロレスキャリアに欠かせない選手ばかりだった。全日本プロレスとプロレスリング・ノア。両団体の間にある垣根を小橋が取り払った。ファンの夢に応えるドリームマッチの連続だった。確執を払拭し参集した選手たちに、小橋の人間性を見た気がする。淵正信(全日本所属)が熊野準(ノア所属)に、切れ味抜群のバックドロップを2連発したほか、大森隆男(全日本)の胸板の厚さも健在。また、セレモニーには田上明(ノア社長)、そして川田利明(元全日本)も登場し、小橋の引退に花を添えた。90年代の活気を思い起こさずにはいられなかった。万感の思いでメインイベントである引退試合を迎えた。

入場曲が鳴り響き、小橋が入場。リングアナによる選手紹介の時、オレンジや紫、黒、小橋カラーの紙テープが舞った。もの凄い量だ。僕は思わず涙腺が緩んでしまった。小橋最後の試合は4対4のタッグマッチ。対戦相手は過去、小橋の付き人を務めた金丸義信、KENTA、潮崎豪、マイバツハ谷口。青コーナーに陣取る。一方、小橋率いる赤コーナーは佐々木健介、武藤敬司、秋山準という面子だ。試合開始直後、KENTAが強烈な張り手繰り出し、早々に小橋を「着火」。逆水平チョップと袈裟斬りチョップで応戦する。映画館が大いに沸いた。

序盤の見せ場は間違いなく、ローリング・クレイドル。回転揺り椅子固めとも呼ばれる技だ。コブラツイストから後方に倒れ込み、その勢いを利用して、相手を反時計回りにグルグル回す。小橋が若手時代に良く使っていたフェイバリットホールドだ。技に移行する前の動きで察知した33歳のプロレス小僧。「出たッ!」。自然に歓声を上げていた。映画館でも敏感に反応していた僕自身に驚く。「いくぞッ!」。掛け声から逆水平の連打を谷口に見舞う小橋。KENTAへのハーフネルソン・スープレックス。ここ4年で一番コンディションが良い。もう二度と観ることは出来ない。そう思うと涙が溢れた。途中、窮地の追いやられるも、自軍選手のアシストから金丸をリアアットでぶっ飛ばした。フラッシュが焚かれる中、ムーンサルトで有終の美を飾った。武道館と映画館が大きく揺れた。

小橋の性格はとにかく素朴で、大口を叩かない。インタビューも下手くそだ。そんな小橋が試合後のインタビューでこう答えた。「引退試合ができなかった自分の先生、馬場さん、兄貴分の三沢さん…引退試合ができなかったので、その分、ちゃんと引退試合をして、という気持ちはあった。一つプロレスラーの道しるべができたのかなと思います」。小橋はいつも、完全燃焼でプロレスに取り組んだ。「(今日の引退にも)悔いはない」。晴れやかに満ち溢れるほど完全燃焼していた。「これ以上試合を続けて、自分の身に万が一があった時、プロレスをもう誰も観なくなる」。だから小橋は引退した。プロレスへの情熱を、リングを去ることによって示した小橋。「小橋選手、本当にお疲れ様でした」。小橋建太に心から感謝した。力ももらって会場を後にしたプロレス小僧33歳。その目は赤く充血していた。誠

information

おかげさまでcollectiveは9周年をむかえました。今回はゲストLIVEにmoanyusky、そしてゲストDJにDELPHONICSの佐藤社長をお迎えするという、スペシャルな1日。ぜひ楽しんでください。

次回コレクティブは秋の開催を予定しています。詳細はブログでご確認下さい。

<http://blog-collective.blogspot.jp/>

育った魂の反応 “moanyusky”

初のmixCD作品となる「国道116号線」という作品を不定期でリリースしているのですが、5年前に構想がスタートした当初の作品を作るにあたっての殴り書きの文書が見つかったので、この機会に書かせて頂きます。

「育った魂の反応」

僕は自分のルーツを知らない。知らなかったことで困ったことは一度もないが、いつも追い求めていたように思う。それは今でも変わりがなく、シャドウを追っかけているような、終わりのない世界だ。

音楽を作ることは、自分のシャドウを作り上げ、その世界にどっぷり浸かりながら、自分の魂の揺さぶりを感ずるといって他ならない。魂の動きを感じた時に、過去の記憶が立体的にリアリティと叫ぶような。そんなバイブスがあり、安心を喰う。

僕はベッドタウンで育った。毎朝、大人も子供も、その町から朝ごはんを食べ、飛び出していった。脱け殻のようになった町には、じいさん、ばあさん、静けさだけが残っていた。オームの脱け殻のような町に一番に帰ってくるのが、こどもの頃の僕達だった。何も変わらない郊外の空を眺めながら、僕はクーラーの効いた部屋で良く音楽を聴いた。

シャーデーと坂本龍一の1996がループして流れていたことを記憶している。良くわからん高揚感が独特なリズムで広がっていく。シャーデーのリヴァーブいっぱいパーカッションに押し倒され、チェロとバイオリン、ピアノのharmonyは魂を安心させた。ああデュビシーだな。そう気付くのはまだまだ先の話である。

金曜ロードショーの夕日を見て育った。食卓から聞こえてくる包丁とまな板のパーカッションに癒され、「なんでも鑑定団」の鑑定中の音を聴き、ハラハラドキドキした。

カッコ悪いかい？
いや、愛しく、涙が出るんだ。
僕は日本人であり、田舎者なのだ。

昼の二時、衛星放送から、少しデジベルが小さな映画から流れ出す、オーケストレーションを聴き、静かな無音の町のパルスを感じて、僕はトイレに駆け込んでいた。

安心してた。変な顔をしながらウンコする。地方都市の静けさに、無差別に安心が吐き出されていたのだ。安心はどこに流れ着いているのか。ヘドロのように最終地点へ流れ込んでいるはずで、時間に追われ、忘れ去られる。溜め池は墓場となり、魂が反応する忘れられた場所と化しているはずだ。ヘドロの横にはいつも母の様に音楽が寄り添っていた。

僕が大好きなアメリカのヒップポップのビートジャンキーたち、パブリックエナミーのチャックDの紳士的な対応に心を打たれた時に、すべてが繋がった様に思えた。

エメットブラウンがトイレで滑って頭を打ってタイムマシンの思い付いたぐらいの稲妻が走った。自分の安心を、快樂を、車を走らせ探していく日々が始まったのはこのような考えからだった。

DJシャドウが倉庫にこもってディグする姿を車の中で思い出していた。倉庫の暗さと光る7インチ。同じ雰囲気を持っている場所は一つしかなかった。国道沿いのリサイクルショップへ僕は向かっていた。四時間居たとしても、客は一人ぐらいしか入ってこない。じいさんがレジで一言も話さず、人形のように座っている。

そこにはホコリをかぶったレコードたちが、山のように積まれていた。7インチは光っている。ヘドロの臭いがした。育った魂はシャドウを作り始め、反応する。時間が無くなる瞬間だった。

地方都市からリアリズムをディグする。この瞬間、取り戻したかのように振り子時計のチャイムの音が鳴り響いた。その音と共に昔の子供たちがリサイクルショップの重い扉を開き、走り出して行った様子を僕は目撃した。光が大量に入り込んだ。光で見えないが、笑っている。たぶん僕か、元気だな。扉は勢い良く開まり、ホコリが舞った。光はもう無い。指先は歴史と共に真っ黒になっていた。魂が揺れている。僕は安心して笑っていた。

文書はここで終わっている。この文書を書いて5年は経っていると思う。僕はベッドタウンを出て、結婚した。息子も三才になり、僕に歌を歌ってくれるぐらい大きくなっている。

その歌なんなん？

この歌「海苔」っていうね。知ってる？

ごめん、知らんわ。

違う町で空をぼうっと見ている。魂が落ち着いていないことは知っていた。いつも遠くでヘドロが動く音が聴こえるんだ。シャドウがうるさく僕に問いかける。まったく、生きるということは何めんどうくさい。

涼音ディスクガイド2013 “tawaki”

みなさま、本日はcollective9周年パーティーにお越しいただき、ありがとうございます。関西も梅雨入りし、蒸し暑い日々がはじまりましたね。「せめて音だけでも涼しいものを」と、昨年に続き、涼音ディスクガイドをさせていただきます。

昨年は5人アーティストを紹介したのですが、今回は1人のアーティスト、YOSHITAKE EXPEにフォーカスを絞って紹介します。

collectiveのお客さんのなかには、YOSHITAKE EXPEを知らない方もわりと多いのではないかと推測しますが、彼は地元大阪出身のギタリスト。

「涼音」という括りだと、アコギをイメージするかもしれませんが、YOSHITAKE EXPEはバリバリのエレキギタリストです。僕自身、あまりエレキギターを前面にフィーチャーした音楽は聴かないのですが、YOSHITAKE EXPEは別格扱い。エレキギターをスペースイーターかつファンキーに奏でさせたら右に出るものなし、と思わせる手足れなのです。

僕がYOSHITAKE EXPEの存在をはじめて知ったのが2003年。ちょうど大学生のときでした。MUSIC MAGAZINEの2003年度ベストアルバムにも選ばれたNUTRON名義のアルバムがきっかけ。コンパクトエフェクターで、音響加工をしながらグルーブを構築するスタイルは今なお斬新です。

当時、何度かLIVEを観に行ったりすることもあったのですが、この数年はすっかり、ごぶさたしていました。そんな折、生駒山中腹にある宝山寺の門前町旅館をリノベーションした自然食の店「ナイヤビンギ」でYOSHITAKE EXPEのCD「teera」(2008)を偶然発見。実に10年ぶりにチェックするようになりました。

アルバム「teera」は、基本的にエレキギターとエフェクターだけで作ったシンプルな作品ですが、全編にわたり沖縄の聖地「久高島」のフィールドレコーディングした音が散りばめられており、冷んやりした質感にどこか暖かみのある不思議な感覚を味わえます。

一方、昨年リリースされたEXPE名義のアルバム「emeralda」(2012)はteeraと打って変わって、ファンキーなバンドスタイルなのですが、これはこれで秀逸なのでパワーブッシュ。emeraldaのドラマーは、かつて、collectiveでおこなったワカタンカ(スチールパン奏者トーチが在籍するユニット)でも敏腕をふるってくれた千住宗臣。これがまた素晴らしいのです。ミニマルなギターに不規則でありながら正確に刻まれるなドラムビートの快感。近年のベストアルバムとしてオススメです。

YOSHITAKE EXPEの作品はアルバムごとにより性格が異なりますが、いずれもシンプルかつタイトだという特徴があります。季節を選ぶ音源ではないですが、個人的には夏に聴くと気持ちいいと思います。

YOSHITAKE EXPEのHP
<http://www.nuexpe.com/>